

主体的に活動し、よりよい学校生活づくりに参画する児童の育成

－心理的安全性を高め、活動の見通しを持たせる指導の工夫を通して－

多賀城市立多賀城小学校 金子 圭太

1 はじめに

(1) 今日の課題

こども家庭庁が実施した「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査(令和5年度)」からは、日本の子供・若者の社会参画の意識が諸外国と比較して低いことが明らかになっている。小学校学習指導要領(平成29年告示)特別活動編においては、特別活動全体を通して、自治的能力や主権者として積極的に社会参画する力を育てることを重視し、学級や学校の課題を見だし、よりよく解決するため話し合って合意形成すること、主体的に組織をつくり役割分担して協力し合うことの重要性が明確に示されている。

(2) 授業づくりに関わる課題

これまでの学級活動の実践を振り返ると、学級や学校の諸問題について、児童の思いや気付きではなく教師の思いや都合によって考えさせてしまうことが多かった。また、様々な集団活動において、見通しを持たせたり振り返ったりする場が不十分であった。そのため、こうあってほしいと願う教師の意向や、発言力のある一部の児童の考えによって物事が進んでしまっていたり、よりよい学校生活にするための個や集団としての成果や課題を共有することができていなかったりした。結果として、多くの児童に対して、学級や学校の一員としての当事者意識や、よりよい学校生活をつくろうとする主体性や自治的能力を養うことができていなかった。

(3) 児童の実態

本研究の対象である第5学年児童101名に意識調査を実施したところ、「学級や学年をよりよくしたいと思っているか」という質問に対しては9割以上の児童が肯定的な回答をしていた。一方で、「学級や学年をよりよくするために、行動したり発言したりしているか」「学級活動では、自分の意見や考えを述べているか」という質問に対しては、約4割の児童が否定的な回答をしていた。その理由としては、「周りにどう思われるか気になる」といった心理面の課題、「何をしたらよいか分からない」という行動面の課題があることが明らかになった。

(4) 研究主題について

上記のことを踏まえ、学校生活をより楽しく充実したものにするために、自分たちで課題や目標を見だし、その解決や達成に向け自分たちで行動する児童の育成を目指し、本研究の主題を設定した。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究は、主体的に活動し、よりよい学校生活づくりに参画する児童の育成を目指すものである。そのために、学級活動において、児童の自発的、自治的活動を促すとともに、心理的安全性を高め話し合いを活性化させたり、活動の見通しや成長の実感を持たせたりしていく。「主体的に活動する」とは、「取り組むべきことや目標を自分で決め、率先して取り組むこと」、「よりよい学校生活づくりに参画する」とは、「楽しく充実した集団生活をみんなが送れるようにするために行動すること」と定義する。

(2) 研究の対象範囲

本校では、高学年においてチーム担任制を導入しており、私が担当する第5学年においては3つの学級を4人の教員が一定の期間で交代しながら担任している。そのため、本研究は第5学年の全学級を対象とし、4人の教員で共通理解を図りながら実践に取り組んでいくこととする。

(3) 研究の方法

本研究では、学級活動「(1)学級や学校における生活づくりへの参画」における実践において、以下の3つの手立てを講じる。研究の対象である第5学年児童への意識調査の結果や実践の様子、学級会ノート等における振り返りの内容から児童と学級の変容を考察し、手立ての有効性を検証する。

① 自発的、自治的活動を促すための自己決定の場の設定

児童が自己決定を行うことができる機会や場を設け、自発的、自治的活動を促していく。そのために、活動の目的や、よりよい集団活動にするために必要となることを児童自身に考えさせ、自分たちが目指したい姿や取り組むべき課題を見いだすことができるようにする。

② 心理的安全性を高める工夫

タブレット端末上でデジタルホワイトボードやオンライン表計算ソフト等のアプリを活用して各自の考えを視覚的に共有したり、小グループによる話し合いの場を設定したりすることで、全員が合意形成に関わる場面を多く持つようにする。また、よりよい話の聞き方や合意形成のプロセスに関して共通理解を図ることで、互いの考えを尊重し合う態度を育み、心理的安全性の向上につなげる。

③ 活動の見通しを持たせ、成長を実感させる働き掛け

よりよい集団生活づくりに参画するために何をしたらよいかの見通しを示すとともに、個や集団としての成果と課題を振り返らせる手段として「自分レベルアップシート」を新たに作成し、これを活用して児童の行動変容につなげることができるようにする。また、集団生活をよりよくするための児童の気付きや考え、自分ができたことや友達が頑張っていたことを掲示するコーナーを設けることで、活動の見通しを持ったり成長を実感したりすることができるようにする。

3 研究の結果と考察

(1) 授業実践Ⅰの概要と結果

授業実践Ⅰでは、遠足・集団宿泊的行事である花山宿泊学習を題材として取り扱った。

① 自発的、自治的活動を促すための自己決定の場の設定について

事前学習で、花山宿泊学習の意義や目的について考えさせた。児童からは、「協力するため」「できることを増やすため」「けじめを身に付けるため」など様々な考えが出され、課題意識を持ってこれからの活動に取り組んでいこうとする意欲の高まりを感じた(図1)。

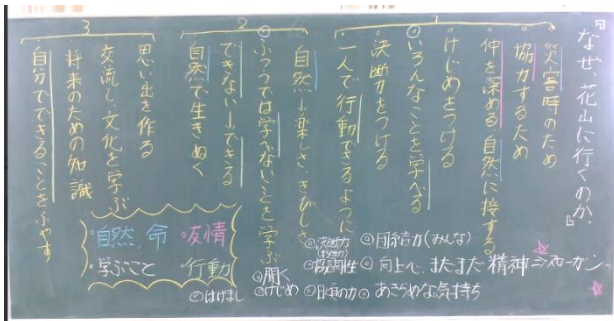


図1 児童が考えた宿泊学習の目的をまとめた板書

また、児童の自発的、自治的活動を促すために、これまで慣例として教師が決めたり示したりしていた内容を見直し、児童が自ら考え意思決定できる機会や場を設けた。活動グループや部屋のメンバーの決め方、集団生活や活動に関わるルール等を児童に考えさせ実践させることで、よりよい集団活動をつくり上げようとする主体性や当事者意識を育むことができた。

② 心理的安全性を高める工夫について

事後の学級活動では、事前学習から宿泊学習当日までの一連の実践を振り返った。グループでの話し合いにおいてはタブレット端末上でデジタルホワイトボードの付箋機能を活用し、よりよい学校生活づくりにつながったと思う場面や行動、課題と感じた場面や行動について意見を出し合わせた（図2）。

I C Tを活用することで、発言することが苦手な

児童も含めた全員が自分の考えを表現することができており、心理的負担の軽減につなげることができた。しかし、付箋に入力したことを基にグループとしての考えをまとめる場面では話し合いが停滞する様子が見受けられ、グループによる話し合いの経験が不足していることがうかがえた。

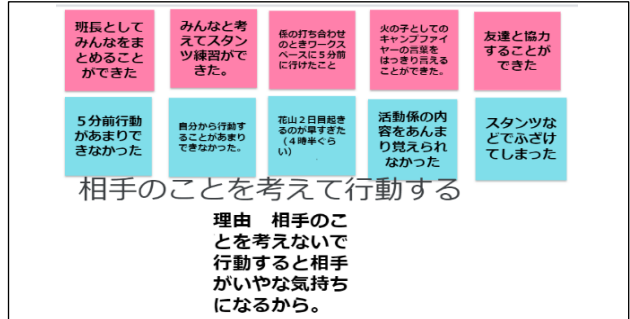


図2 デジタルホワイトボードを活用したグループの意見

③ 活動の見通しを持たせ、成長を実感させる働き掛けについて

宿泊学習当日までのスケジュールや、スローガンを念頭に実行委員が中心となって決めた「花山合言葉」を学年の廊下に掲示することで、活動の見通しを確かめたり、時間や決まりを意識して生活したりする児童の姿が見られた。

事前学習及び宿泊学習当日には、活動における自分たちの成果と課題を「自分レベルアップシート」に記録させた(図3)。事後の学級活動では、「自分レベルアップシート」を活用することで、具体的なエピソードや客観的な事実に基づいて自分たちの成果と課題を振り返ることができている児童が多かった。しかし、シートの項目や内容の吟味が不十分であったために、集団生活をよりよくするために何をしたらよいかという方向性を示すものにはなっていなかった。

参加者にもなる(予定) 17(B) (月) 活動グループあり 20(B) (木) 修了の打ち合わせ	活動に参加するの楽しみよう、 自分について
18日 (火) グループのなかで、身分が決め たいのであて みえよう相殺して、まだ1ヶ月がたらないよ、かたがた。	活動のグループが、 係などが決まるとよ、 たどす。話し合て決めた のよ、かたがたし、自分の 役割を果たしたいとは できると思っています。 日時ややりかたは、たたり たいので、ごまは、もうし たいは、たどるところだと思 います。

図3 児童が記入した「自分レベルアップシート」(I期)

(2) 授業実践Ⅱの概要と結果

授業実践Ⅱの題材「下学年と交流会をしよう」は、これまで学級・学年の友達と力を合わせて様々な活動に取り組んできた経験を生かして下学年ともよりよく関わられるようにになりたいという児童の思いを受け、議題として選定された。

① 自発的、自治的活動を促すための自己決定の場の設定について

児童と議題について確認する際には、学級・学年による集会活動と、下学年と交流する集会活動との

違いについて考えさせた。そこでの気づきを生かし、児童は下学年の立場を考えながら活動内容や工夫について考えることができた。また、自分たちの目指す交流会を実現するために必要な係について考えさせ、それを全員で分担した。招待状づくりや会場装飾、ゲームの準備等、同じ役割の児童同士で協力しながら自発的、自治的に活動に取り組む姿が見られた（図4）。交流会当日も、教師に頼らず自分たちの力で会の運営を臨機応変に行う様子が見られた。

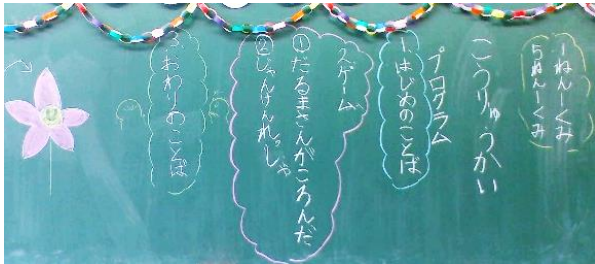


図4 準備係の児童が制作した会場装飾の一部

② 心理的安全性を高める工夫について

事前の活動として、タブレット端末上でオンライン表計算ソフトの共同編集機能を活用し、交流会の内容や工夫について、一定の期間、小グループで自由に意見交流ができるようにした（図5）。その後、そこに記入した内容を基に小グループとしての提案をまとめ、学級会において出された意見についても小グループで話し合う時間を設けた。学級全体の中では意見を述べるのが難しい児童も、少人数の気軽に意見を交わしやすい雰囲気の中で自分の考えを受け入れてもらえたという実感を持つことができ、活発な意見交換を行う姿が見られた。

名前 (A)
やる場所 ワークスペース
やること だるまさんの一日
理由 1年生も楽しめると思ったから。
名前 (B)
・だるまさんの一日
理由 1年生も知っているし、1年生も簡単にできると思ったからです。
名前 (C) 10/17~10/20
・だるまさんの一日をする。
・ルールを知らない人もいいると思うから、1年生にわかりやすい説明になるようにする。
・走るのはいし、痛ったり、何回も鬼 (?) になったりするのはいし、とかだったらいいと思う。
・黒板にプログラムとかを書くのはいし、と思う。
・理由はわいわいできそうだったから。
グループの提案
やること
じゃんけん列車
理由
・1年生と仲が深められるから。
・1年生とじゃんけんができるし、勝ったことがない子でも、仲が深められそうだなと思ったから。
・痛らないで笑顔いっぱいになる。
・5年生と1年生が組められるようにする。
爆弾ゲーム
理由
・ワークスペースでできることだから。
・1年生と仲が深められるから。

図5 小グループで意見交流をしたオンライン表計算ソフト

小グループによる話し合いや学級会の前には、よりよい話の聞き方や合意形成のプロセスについて、掲示物を用いて共通理解を図った。児童は、互いの考えにしっかりと耳を傾け、共感的に受け止める様子が見られた。その上で、「提案理由に沿っているか」「みんなにとってよいことか」という視点で活発に話し合い、多数決に頼らずに合意形成を図ることができた。

③ 活動の見通しを持たせ、成長を実感させる働き掛けについて

事前の活動では、下学年と交流する集会活動を実施するに当たり、どのような言動や態度がよりよい集団生活につながるかを学級全体で話し合い共有した。そこで共有した内容を「自分レベルアップシート」の評価項目とすることで、よりよい集団生活づくりに参画するために何をしたらよいかという方向性を示すとともに、目標とする姿に自分がどれだけ近づいているかを確かめられるようにした（図6）。初めは自己評価の低かった児童もいたが、交流会を終えた後の振り返りでは、どの項目においてもほぼ全ての児童が肯定的な評価をしていた。授業実践Ⅰの課題を踏まえて「自分レベルアップシート」の様式を改善したことで、児童は集団生活をよりよくするために何をしたらよいかが分かり、実践を通して自分たちの成長を実感することができたものと考えられる。

めざす自分たちの姿	期間	ふりかえり(ふりかえりした、ふりかえりしなかった)	ふりかえり(ふりかえりした、ふりかえりしなかった)
① みんなにとってよいことは何かを考えながら話し合う。 (学級・交流会の準備など)	10/16~10/18 10/21~10/25 10/28~11/1	4 3 3	2 2 2
② 友達と協力しながら、自分の役割を果たす。 (第一学年・委員会・学級など)	10/16~10/18 10/21~10/25 10/28~11/1	4 3 3	2 2 2
③ 1年生の立場を考え、やさしく接する。 (学級・交流会の準備・交流など)	10/16~10/18 10/21~10/25 10/28~11/1	4 3 3	2 2 2

図6 児童が記入した「自分レベルアップシート」(Ⅱ期)

集団生活をよりよくするために自分ができたことや友達が頑張っていたことを「見える化」することで、自分たちがよりよい学校生活づくりに参画できているという自信や実感を持たせ、更なる実践意欲の向上につなげたいと考え、「みんなのかがや木」と題した掲示コーナーを設けた（図7）。「学級会でグループの意見を進んで発表した」「ルールが分からない1年生に優しく教えてあげた」など、児童は交流会に向けた活動や日々の学習活動における自他のよさや頑張りを花状の付箋紙に記述して掲示した。児童の行動変容につながるまでの成果は実感できなかったが、自己有用感の醸成にはつながったと考える。



図7 児童の手で制作した「みんなのかがや木」

4 おわりに

(1) 意識調査の結果から n=101

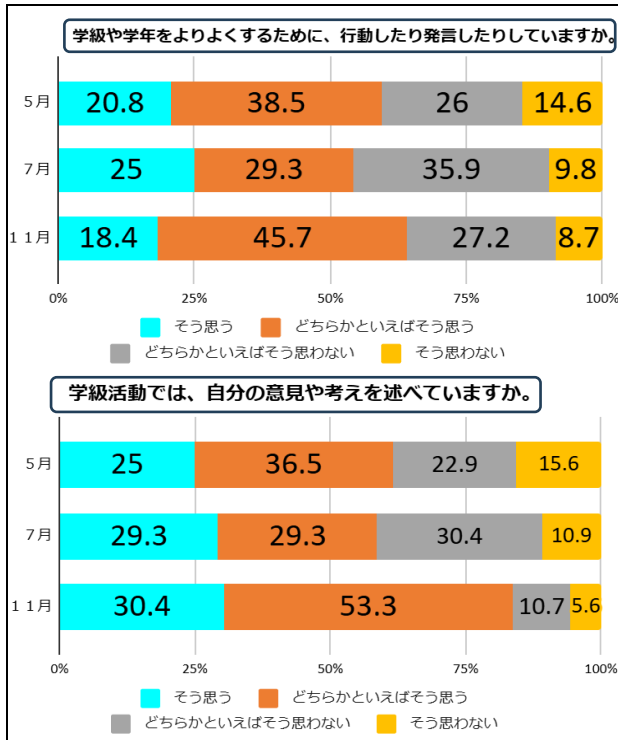


図8 意識調査の変化

「学級や学年をよりよくするために、行動したり発言したりしているか」という質問に肯定的な回答をした児童の割合が5月から11月で約5%増加した。肯定的な回答をした児童の内、4割以上が「自分にできることが分かったから」と回答しており、「自分レベルアップシート」の活用により目指す自分たちの姿を具体化し共有したことが、集団生活をよりよくするための行動につながったものと考えている。また、「学級活動では、自分の意見や考えを述べている」という肯定的な回答は20%以上増加した。その理由として最も多かったのは、「グループだと意見が言いやすいから」だった。小グループによる意見交流の機会を多く設けたことで、学級全体の中では意見を述べることに不安を感じる児童も自分の意見を述べることができ、合意形成に関わることができたという実感を持つことができたと考えている。

(2) 児童の振り返りから

児童が学級会ノートや「自分レベルアップシート」に記入した振り返りからは、集団生活をよりよくするための自他の成長についての記述が多く見られた。以下は児童の振り返りの記述である（図9）。

- ・前までは自分の意見を話すことが苦手だったけれどグループの中では意見を述べることでできてきました。これからは、学級会で一回でも意見を述べることを目標にしていきたいです。
- ・1年生のことを考えて話し合いができたと思います。友達は後のこともきちんと考えていてすごいなと思いました。

- ・今日の学級会は多数決が少なく、みんなの納得のいく結果でよかったです。

図9 児童の振り返りの記述

(3) 研究の成果と課題（成果○、課題●）

- 自己決定の場を設定することで、児童が自分たちでよりよい活動に向けて考え行動に移す姿が見られた。
- ICTを適宜活用しながら小グループによる話し合いの場を設けることで、児童が活発にやりとりをする様子が見られた。お互いに相手の意見を受け入れる経験を重ねたことが心理的安全性を高めることにつながった。
- 「自分レベルアップシート」の活用により、児童は集団生活をよりよくするために何をしたらよいか分かり、実践と振り返りを通して自身の成長を感じることができた。
- よりよい学校生活づくりへの意識は高まったが、主体的に活動する姿を実現するためにはまだまだ実践を積み重ねていく必要がある。

(4) まとめ

主体的に活動し、よりよい学校生活づくりに参画する児童の育成を目指して実践に取り組んできた。活動の見通しを持たせた上で、児童自身がよりよい行動について考え実践する機会を充実させることで、児童の意識や行動の変容につながることが分かった。また、それらの取組の土台として、心理的安全性の高い学級・学年集団づくりを日常的、継続的に行うことの重要性を改めて感じた。

今後も実践を継続することで、よりよい学校生活づくりに対する児童一人一人の意識を一層高め、行動変容につなげていく。また、児童が実践を通して学んだことを日常生活やその後の活動に生かすことができるようにするための指導の工夫について、更に研究を深めていく。

【引用・参考文献】

- 1) こども家庭庁（2023）「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査（令和5年度）」
- 2) 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成29年告示）特別活動編」
- 3) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2018）「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）」
- 4) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料」

【図表等の許諾について】

図2、図3、図5、図6、図9は児童が記入したワークシートやオンライン表計算ソフト、振り返りの記述の一部である。氏名や個人が特定できるものは掲載せず、研究の目的にのみ使用することとし、児童の保護者及び所属校長から使用許諾を得た。